慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済学会シンポジウム : 経済学の潮流 : 序
Sub Title	Keio economic society's symposium : trend of economics : preface
Author	新井, 拓児(Arai, Takuji)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2016
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.108, No.4 (2016. 1) ,p.699(51)- 701(53)
JaLC DOI	10.14991/001.20160101-0051
Abstract	
Notes	経済学会シンポジウム : 経済学の潮流
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20160101-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」108 巻 4 号（2016 年 1 月）

経済学会シンポジウム

――経済学の潮流――

新井拓児 *

去る 2015 年 11 月 18 日，慶應義塾大学三田キャンパス北館の会議室 2 において「慶應義塾経済学会シンポジウム」が開催された。この日は，三田祭による 1 週間のブレイク（正確には 18 日の午前中は補講日である）の初日であった。今回で 15 回目を数えるこのシンポジウムは，会員の相互交流を目的とし，隔年で開催されているイベントである。今回は 17 名の会員が出席したが，この数は会員の 2 割程度であり決して多いわけではない。ただ，近年の大学教員は大変多忙であるという現状を考慮すれば，致し方ない数字であろう。かつては合宿形式で行われたこともあったようであるが，現在の大学が置かれている状況からは想像がつかないことである。

経済学会における各会員の出身学部を辿れば，経済学部や商学部などの社会科学系の出身者が多く含まれていることは想像に難しくないが，人文系や理工系の出身者も含まれている。これは，経済学部がカバーしている専門領域には，社会科学は言うまでもないが，人文科学や自然科学に基礎を置く分野も含まれていることを示している。このような専門領域のダイバーシティーを持つ学部は他に類を見ないものと思われる。従って，同じ学部に所属していながら，研究分野が異なるだけでなく，研究への基本的なアプローチや，学問に対する価値観すらも大きく異なる場合が珍しくない。今回のシンポジウムでも，理論系の講演では講演途中でも盛んに質疑応答が行われたが，経済史の講演では質疑応答が講演の最後にまとめて行われるなど，分野によるカルチャーの違いが現れた場面もあった。このような経済学部の背景を考慮すれば，教員同士の相互理解を深めることは大事な意味を持つ。ところが実際にはそのような機会は非常に限られており，教員間の学術上の交流が十分に行われているとは言い難い。経済学会シンポジウムはその限られた貴重な機会であり，経済学部における学術研究の発展にとって欠くことのできないイベントである。

今回のシンポジウム開催にあたって，近年の慣わしに従い，最近経済学部に着任したばかりの会

＊　慶應義塾大学経済学部

員の方々に講演を依頼した。今回の講演者は，山田浩之氏，松沢裕作氏，中西聡氏，星野崇宏氏，藤原一平氏の 5 名であった。分野は開発経済学，日本経済史，計量経済学，マクロ経済学に渡り，経済学部の多様性を反映した形になった。

まず山田氏は，「開発経済学の現状と今後の展望」と題し，主に途上国の貧困をテーマに講演を行い，理論研究の変遷，実証分析の問題点，今後の展望などを多くの実例と共に紹介した。とりわけ，randomized controlled trial（RCT）という手法を紹介し，さらには行動経済学的アプローチを取り入れた実例が取り上げられた。続いて，松沢氏と中西氏により日本経済史に関する講演が行われた。松沢氏は，「日本近代村落論の課題」と題し，日本の村落をテーマにした報告を行った。さらに昼休みを挟んで中西氏の講演が行われた。そこでは，「地方資産家からみた近代日本資本主義」というタイトルで，明治以降の日本の資産家の投資行動に関して議論が行われた。約 100 年前の資産家の投資行動が，現代のファイナンス理論からみても合理的と思われるものであり，ファイナンスを専門とする筆者にとって非常に興味深いものであった。続いて，「因果効果推定とその応用」というタイトルで，星野氏の講演が行われた。これは，計量経済学の理論研究における potential outcome approach による統計的因果モデル，より具体的には Rubin causal model に基づく因果効果について論じたものであった。定義や推定法の紹介に続いて，異質性への拡張など星野氏のこれまでの研究を踏まえながら議論が展開された。最後に，「金融経済学，国際金融論：動学一般均衡モデルの視点から」と題した藤原氏の講演が行われた。マクロ経済学における動学一般均衡モデルの進展を，事実解明的分析と規範的分析の 2 つに分けて，その歴史的背景やモデルの解法に関する解説が行われた。さらに，藤原氏がこれまで取り組んできた研究のいくつかが紹介された。

本特集号では，上記の 5 名の講演者の中から松沢氏より寄稿された解説と，中西氏より寄稿された論説を掲載する。尚，「解説」とは研究者を対象としたものではなく，学部生向けに研究分野を紹介することを目的に書かれたものである。今回の経済学会シンポジウムは，出席率は決して高くなかったが，大変活発な議論が展開された刺激的な会合であった。これは誠に喜ばしい限りである。

テーマ：経済学の潮流

プログラム：

2015 年 11 月 18 日（水）

午前　11：00〜1：00

山田浩之 「開発経済学の現状と今後の展望」

松沢裕作 「日本近代村落論の課題」

午後　2：00〜5：00

中西　聡 「地方資産家からみた近代日本資本主義」

星野崇宏 「因果効果推定とその応用」

藤原一平 「金融経済学，国際金融論：動学一般均衡モデルの視点から」

会場：慶應義塾大学三田キャンパス　北館 1 階会議室 2

参加者（50 音順，敬称略）：

新井拓児	長倉大輔
池尾和人	中西　聡
池田幸弘	藤原一平
大西　広	別所俊一郎
川俣雅弘	星野崇宏
小林慶一郎	松沢裕作
塩澤修平	柳沢　遊
白井義昌	山田浩之
寺井公子	

17 名